

日英語のうなぎ文

時崎 久夫

札幌大学

toki@sapporo-u.ac.jp

1. 問題の所在

「僕はうなぎだ」という、うなぎ文については、述語代用説(奥津 1978)、分裂文説(北原 1981)、述語消去説(杉浦 1991) など多くがあるが、どれも定説にはなっていない。また英語のうなぎ文については、詳しい考察がなされていない。

以下、英語のうなぎ文を日本語と比較して考察し、どちらも変形や省略によるのではなく、表の対応を示すものであることを述べる。*

2. うなぎ文の定義

まずうなぎ文と言われるものを整理しておこう。

- (1) a. 僕はうなぎだ。
- b. 吾輩は猫である。

この2つの文は、自然に想定される文脈における解釈では、(1a)は食堂の注文として僕がうなぎを注文するという意味となり、(1b)は小説の主人公である猫が自分が猫であるということを述べている意味となる。ここでは西山(2002)に従い、この(1a)の解釈を「うなぎ読み」と呼ぶ。(1b)については仮に「猫読み」としておく。僕はうなぎという属性を持っているわけではなく、吾輩は猫という属性を持っている。簡単に言えば、うなぎ読みでは「僕=うなぎ」ではないが、猫読みでは「吾輩=猫」である。¹

このようにうなぎ読みを定義すると、次のような文もうなぎ文に入ることになる。

- (2) a. [うなぎはどちらで?] 僕がうなぎだ。
- b. [うなぎはどちらで?] うなぎは僕だ。
- c. うなぎが僕だ。(親子がそちらだ。)

これらの文は食堂での注文には用いられないという理由でうなぎ文ではないとする考えもあるが(cf. 杉浦 1993:313)、どの文においても、「僕=うなぎ」ではないという点でうなぎ文であると言える。

* 本稿は西山(2002)に触発されてできたものであり、西山佑司氏に感謝したい。葛西清蔵氏からは有益な助言をいただいた。感謝を述べたい。内容に関する責任はすべて筆者にある。

¹ (1a)の猫読み、(1b)のうなぎ読みも適切な文脈を作れば可能である。うなぎの独白小説、ペットの飼い主同士の会話などが考えられる。

3. 先行研究と問題点

さてここで先行研究を概観しておこう。奥津(1978)は「だ」が述語（食べる）の代用であると考え、次の(3a)から(3b)を派生し、さらに「を」を消去してうなぎ文(1a)を生成する。

- (3) a. 僕はうなぎを食べる
- b. 僕はうなぎをだ

また杉浦(1991)は(3a)から述語「を食べる」を消去して(4)を派生し、それに任意に断定の「だ」を付加したのがうなぎ文(1a)だとする。

- (4) 僕はうなぎ

また北原(1981)は(5a)の分裂文からの派生を示している。

- (5) a. 僕が食べたいのはうなぎだ
- b. 僕のはうなぎだ
- c. 僕のはうなぎだ

こうした変形による分析に対し、Fauconnier (1985)は「僕」から「僕の注文料理」へのマッピング、すなわちメトニミーであると考えている。²

- (6) 僕(→僕の注文料理)はうなぎだ。

坂原(1990)は、ある変域の役割がある値だという同定文から役割が省略されたものとする。

- (7) a. 僕の注文料理はうなぎだ
- b. 僕は(注文料理は)うなぎだ

中島(1987:118)も(7a)の文の「僕」を題目にし、他の人と対比した表現だと述べている。これに対し、西山(2002)は、うなぎ文は倒置指定文（同定文）ではなく措定文の一種であると述べているが、構造としては同様のものを示している。

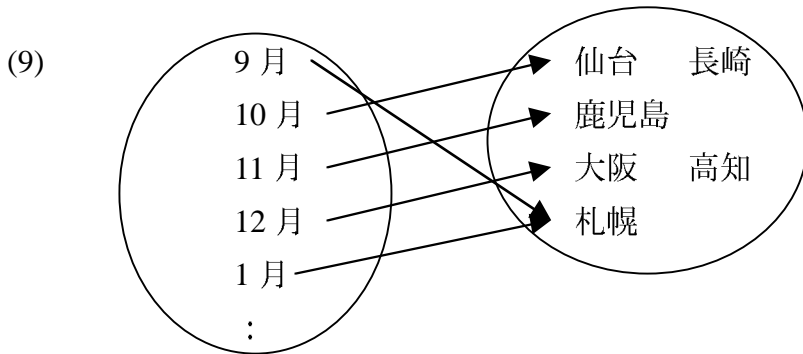
- (8) ぼくは、[øはうなぎだ]

こうした変形や比喩、また二重主語を仮定する分析に対し、うなぎ文をそのままの形で扱う考えもあり、本稿もこれに属する。まず国広(1986)はShank and Abelson (1977)のスク립トという概念を使って、うなぎ文は食堂という場所で客と注文料理が変項の型でスロットとして含まれ、これを埋める文だという考えを示している。³ また杉浦(1993)は、うなぎ文はそのままの形で生成され、2つの集合間の多対一対応を表すものとする。⁴ 例えば、「来月は僕は大阪だ」という文は、次のような図で示されている(p. 301)。

²メトニミー説に対する詳しい反論については西山(2002)を参照されたい。

³本稿も表の空白という点でこれと共通するが、常に場所によってスク립トが決められているのではなく、対照的な文の存在によって表が形成されるという点が異なる。

⁴杉浦(1993)は国広(1986)のスク립ト説を批判して、スロットに名詞が入るといっただけなら「AはB」と「BはA」の違いが説明されないと述べているが、本稿の表の読み上げという考えでは、AとBのどちらから読み上げるかという違いであると説明できる。



ここですべての分析について検討する余裕はないが、格と一致の点から従来の説の問題点を指摘しておきたい。ロシア語の文を見てみよう。

- (10) a. Q vodu
I water(Acc)
'I'll have water.'
- b. % Q voda
I water(Nom)
'I am water.'

インフォーマント3名のうち2名は(10b)を容認した。格の点から述語代用説、述語消去説では(10a)のみしか派生できないであろう。また、分裂文説、メトニミー説、役割消去説では、なぜ英語で主語との一致で be 動詞が3人称にならないのか説明する必要があるだろう。

- (11) a. What I ordered is the ham sandwich.
b. * I is the ham sandwich.

同様に注文が複数であっても主語が I などの単数であれば be 動詞は複数にならないという事実も説明を要すると思われる。

- (12) a. What I ordered are the ham sandwich and the lemonade.
b. * I are the ham sandwich and the lemonade.

4. 定名詞句制限

英語を詳しく考えてみよう。Bolinger (1968)はレストランのレジでの表現を示している。

- (13) You've got us confused: you're charging me for the noon special; the man in front of me was the noon special; I'm the soup.

また Hoffer (1972)はレストランの給仕と客の会話を示している。

- (14) Waitress: Now, who is the veal parmesan and who is the spaghetti?
Patron: I'm the veal; he's the spaghetti.

さらに中野(1982)の示すマンガの例では兵隊 A が上官 B, C, D にコーヒーを配っている。

- (15) A: Let's see, sir. You're the black coffee with sugar?
B: Right.
C: I'm the coffee with cream and sugar, Beetle.

A: Okay. (ToD)Then you must be the cream and sugar with no coffee, sir.

D: I don't like your tone of voice!

その他に Fauconnier (1985)は「ウナギは僕だ」に当たる逆行うなぎ文も示している。

(16) I'm the ham sandwich: the quiche is my friend.

(13)から(16)で be 動詞の補語は定名詞句である。実際、不定名詞句は容認されない。⁵

(17) A: I'll have a quiche.

B: *I'm a ham sandwich.

この制限は何によるものであろうか。

Halliday (1967:66)は、be 動詞に叙述・等号・存在の3種類を考えた。叙述と等号の例はそれぞれ(18a), (18b)であり、不定名詞句と定名詞句が補語になっている。

(18) a. (What is Mary's husband?) Mary's husband is a teacher. / *A teacher is Mary's husband.

b. (Who is Mary's husband?) Mary's husband is John. / John is Mary's husband.

(17B)が容認されないのは、a ham sandwich が不定名詞句であるために叙述の be と解釈され、人間がハムサンドだという意味にとられるからであろう。これに対し、(13)から(16)では be の補語が定名詞句であるために、その名詞句が人とは別の個体と認識され、叙述の be とは解釈されない。この be は等号というより対応と言うべきである。

日本語の場合、冠詞がないものの、「僕はうなぎだ」のうなぎは意味の点で不定名詞であると考えられるが許される。これは、be 動詞に当たる繫辞がなく、僕をうなぎと叙述する解釈が生じにくいためであろう。試みに「だ」の代わりに「である」を用い、「僕はうなぎである」とすると、若干猫読みの可能性が高くなると思われる。また、英語の主語が、動詞と数・人称の一致を起こすことからわかるように、確実に文法的な主語になっている。これに対し、日本語で主語と言われる、「は」・「が」で表示される名詞句は、動詞との一致を示さず、文法的な主語の地位を持っているとは言い難い。このことが、日本語で不定名詞句でもうなぎ読みを容易にさせているもう1つの理由であると思われる。

5. 対応表の作成と解釈

うなぎ文が2つの名詞句の対応を示すという点を詳しく考えてみよう。(13)から(16)では2つの文が対照になっている。そして(13)のレストランの文脈も客一人では成立しない。

(19) ??I'm the soup. Do you accept VISA?

これは、日本語(1a)でも同じで、1人で入った客が、「僕はうなぎだ」とは言わない。つまり、うなぎ文とは、対照的な主題を事物と対応させ、頭の中で表を作り、読み上げるもの

⁵ 複数のネイティブスピーカーによる。ただし、久野(1978:92)は、「ハンバーガー店で、まとめて買って来たいろいろな種類のハンバーガーを皆で分けるとき、「I am a cheese hamburger.」などという表現が、たまに聞かれることがある」と述べている。

と言える。

(20)	客	注文	表現
	連れ	かけそば	A: 「かけそば下さい」
	僕	うなぎ	B: 「僕はうなぎだ」

すると(16)の後半の逆行うなぎ文も、表を右側から読み上げているものと説明できる。

(21)	guest	order	expression
	I	→ the ham sandwich	I'm the ham sandwich:
	my friend	← the quiche	the quiche is my friend.

また表であれば項目の対応関係は一定でなければならないと予想される。

(22) A: わたしは、この店初めてだけど。

B: #僕はうなぎだ。

ここではAが人と来店回数、Bが人と注文の表を作ろうとするため、不自然な会話となる。また表なら項目は2つに限らないはずである。そして実際3項目のうなぎ文も可能である。

(23) 店員: ごはん大盛りもできますけど。

A: いや、親子丼、普通で。

B: じゃ、僕はうなぎで大盛りだ。

これは人、注文、量の3項目の表を読み上げた文だと考えられる。

この分析の利点として、「春は曙」、「ビールはサッポロ」などの文で、なぜ「一番良いもの」という解釈が生じる(cf.杉浦 1993:314)かは、表の欄に代表的なものが記入されると考えれば自然に説明できる。表に記入するのに一番に思いつくものということから出てくる意味である。これには広告という文脈も関係していると思われる。「自民は鈴木宗男、社民は辻元清美だ。」では政治不信を招いた政治家ということ、一番良いものという意味は生じない。坂原(1990:63)自身述べているように、これらの文は完全な文からの省略という考え方では、省略された部分が何であるかを特定することは困難である。

2節で英語のうなぎ文では be 動詞の補語が定名詞句に制限されていると述べた。しかし補語が定名詞句以外であっても、be 動詞が叙述でなく、対応の意味に解釈される文脈があって表が作成されれば、うなぎ文は可能になる。次の NHK ラジオ英会話(2001.10.22)で、補語は無冠詞の種類を表す名詞句(形容詞とも考えられる)である。

(24) I brought everyone coffee. Who takes it black and who's regular? Helen?

うなぎ読みが成立するのは、等位接続された前半の節により、人とコーヒーの種類の表が作成されるため、「レギュラー(クリームの入った)」という表現を人の属性の記述としてでなく、人に対応するコーヒーの種類として解釈できるからであろう。

最後に、表の作成に基づく言語表現はうなぎ文だけではないことを指摘しておきたい。

英語の空所化(gapping)はその1例と考えられる。

(25) a. John ate fish and Bill a steak.

b. Henry played the oboe and George *(played) Hamlet.

c. David asked Diana to join the party and Fred Ann.

空所化では(25b)からわかるように、意味の平行性が必要であり、上の(22)と共通するものがある。また(25c)のように、統語的構成素でなく、不連続な部分も「省略」できる。これは省略と言うより、うなぎ文のように表を作っていると考える方が適切だと思われる。⁶

6. まとめ

以上、英語のうなぎ文に定名詞句制限があることを指摘し、叙述と対応という be の意味から説明した。また日英語とも表の作成と解釈によってうなぎ文が成り立つことを述べ、その証拠として逆行うなぎ文(2c)(16)、対照のない例(19)、対応が一定でない例(22)、3項目の例(23)を示した。また英語で定名詞句以外の例(24)をあげ、文脈によって対応表が作成されれば許容されることを指摘した。

参考文献

- Bolinger, D. 1968. Judgments of grammaticality. *Lingua* 21, 34-40.
- Fauconnier, G. 1985. *Mental spaces*. MIT Press. (Cambridge Univ. Press, 1994²)
- Halliday, M.A.K. 1967. Notes on transitivity and theme in English, part 1. *J. of Linguistics* 3, 37-81.
- Hoffer, B. 1972. Contrastive analysis of basic sentence patterns in Japanese and English. 宮内秀雄教授還暦記念論文集編集委員会（編）『日英のことばと文化』三省堂, 213-222.
- 北原保雄.1981.『日本語の文法』中央公論社.
- 国広哲弥. 1986. 「語義研究の問題点—多義語を中心として」『日本語学』5, 9月号, 4-12.
- 久野 日章. 1978.『談話の文法』大修館書店.
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami. 1993. *Grammar and discourse principles: Functional syntax and GB theory*. The University of Chicago Press.
- 中島文雄. 1987.『日本語の構造』岩波書店.
- 中野道雄. 1982. 「発想と表現の比較」國弘哲彌（編）『発想と表現』, 大修館, 33-65.
- 西山佑司. 2002. 「ウナギ文と措定文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第33号.
- 奥津敬一郎. 1978. 『「ボクハウナギダ」の文法』くろしお出版.
- 坂原 茂. 1990. 「役割, ガ・ハ, ウナギ文」『認知科学の発展 第3巻』講談社, 29-66.
- Shank, R. and R. Abelson. 1977. *Scripts, plans, goals and understanding*. Lawrence Erlbaum Associates.
- 杉浦滋子. 1991. 「「だ」の意味～「うなぎ文」をめぐる～」『東京大学言語学論集』12, 81-95.
- 杉浦滋子. 1993. 「「ぼくはうなぎ」と「ぼくはうなぎを」」『東京大学言語学論集』13, 291-315.

⁶ また Kuno and Takami (1993)は英語の多重疑問文について、リストの作成が可能かが容認性を左右していることを述べている。